

# くらしナビ

企業の退職者で作るOB・OG会の価値が再発見されている。心の健康、地域貢献、再就職の世話など活動の幅や目的が広がっているためだ。現役時代に築いた人間関係やスキルを、リタイア後の充実に生かす人々を訪ねた。

コロナ禍が広がった2020年から今年にかけて、JT BグループOB・OG会 関東支部は「玉川上水を歩く」という催しを開いた。東京の西から都心へ流れる上水沿いを何回かに分けて歩く。参加者は平均30人で女性が3分の1を占める。

「感染防止、トイレ、食事の場所には特に配慮した」と企画者の小川元さん(76)。感染状況をみて日程は随時変えた。幹事は事前に2回下見し、トイレの数や飲食店のコロナ対策を確認する。「家に閉じこもり、気分がふさいでいる人も多かった。旅行は無理でも、気が知れた人と歩く機会を設けたかった」

JTBグループのOB・OG会には約4500人が参加する。「旅行会社なので世話好きの人が多く、企画立案も慣れている。散歩、旅行、文化活動の発表

## セカンドステージ

お気に入りのアイルランド人歌手が「自分の若さに感謝している」と言ったとき、とても驚いた。なぜならインタビューに答えた当時その歌手は18歳で、同じ18歳だったとき、私は自分の若さになどちっとも気付いていなかったからだ。

いや、若いことはわかってはいたが、あまりにも当然で、その状態を相対的に把握することはできていなかった。「若さに感謝」という気持ちは、それがずっと続くものではないこと、やがて若い、今の若さを懐かしむときが来ることを、未来を広く深く——知識を超えた実感で——抱かなければ持つことのできないものだろう。

自分の歳をどう受け止めるかということや、老いていくという感覚。そしてそれらを包括する、時の流れのとらえ方。その

### 心の健康づくりや地域貢献



JTBのOB・OG会は玉川上水を散歩する催しを開いた(20年11月)



旭化成OBらによる中学生の学びを助ける活動の様子(19年、宮崎県延岡市)

## 広がる企業OB会の役割

「一般の紹介所では自分に向く仕事が見つからないと悩む企業OBは多い」と事務局長の岡田知二さん(72)。自身も堀場製作所を定年退職後、輸出入業務の経験を生かし他の企業で7年間働いた。「30年から40年かけて身につけたものをよそで役立てられるのは喜び」と語る。

堀場製作所OB会の代表幹事、酒井俊英さん(73)によれば、創業者の堀場雅夫氏は生前「大学は卒業生の活躍で評価される。企業も同じ」と語りOB会を応援した。OB会は「刺激し励まし合う。エネルギーをもらえる場」と酒井さん。活動が地域で歓迎され、NPO法人の設立に至った例が宮崎県延岡市にある。

「子供たちの歓声を聞くのがうれしかった」と語るのは、京セラOBの神者英治さん(77)。京都市の展示体施設で小学生対象に工作を教えた。13年からコロナで休止するまで登板回数は計50回。紙製の虫に光発電パネルを張り、最後に光を当てると羽ばたく。製造業が盛んな京都は技術に明るい企業OBが多い。メーカーなどのOB会では、京都シニアベンチャークラブ連合会(KSVU)は中小企業などからの依頼で人材を紹介する。昨年は年間10人、コロナ前は20人前後がこの会を経由し第二の職場を見つけた。

中学校で数学の学習を手伝ってくれる人はいないかと。同市で創業した旭化成の地元OB会に09年、依

### 人材ストックの機能も

福利厚生専門誌である「旬刊 福利厚生」が企業などのOB会活動を定期調査している。20年秋の最新調査で実施率が高いのは名簿作成(53%)、日帰りツアー(34%)、コロナ前)など。親睦や交流が中心だ。ただし可児俊信・千葉商科大教授の論文同誌20年4月上旬号)によればOB会は新たに人材ストック機能を担い始めている。雇用流動化で優良企業でも人の囲い込みが難しくなる中、退職者は仕事や社風を理解している貴重な存在だ。生涯現役時代を迎え、シニア世代も業務委託などでの発注が増える。米田などでは企業が退職者と縁を切らず、再雇用する動きを「アルムナイ(卒業生)」採用と呼ぶ。レクリエーションから同好会、地域ボランティア、教育と活動の幅を広げてきた企業OB会。次のテーマは雇用になりそうだ。

### 老いも若きも

パリエーションの豊かさにはたびたび驚かされる。たとえば、年下とばかり遊ぶ知人がいる。そのグループの中で彼は突出した年長者で、みんなから「さん」付けて呼ばれ、ほとんど老人扱いでかわかれ

### プロムナード

ているが、そういふ年下たちと同じファッションに身を包み、同じ口調で話すことを彼はまったくやめようと思わない。

一方、学生でありながら50代、60代の人々と一緒にいることを好む後輩もいた。彼の言動は彼の友人たちを惹きつけた。疲れた「を繰り返す、パイプ椅子に重々しく腰を下ろし、片眼を



つむむって煙草をふかしながら「近頃の若者」を憂える……。どちからもちよと変わって行く。でも、決して受け狙いでそうしてはいただけではなかった。本人たちは、ただしつくりくる環境にいたただけなのだ。

私自身は、その2人のように、若さと老いのどちらか一方に親しみを抱くというところはない。と、いって、アイルランド人

### 古谷田 奈月

歌手のように興行きのある時間感覚を持つているわけでもない。私には「今」だけだ。自分の若さに気付いていなかった18歳のころと同じように、39歳の今、その年齢について、どう思えばよいかわからない。

「アラサー」という言葉は私の世代がアラサーにさしかかった頃に流行りだした記憶があるが、30代という年齢層がそうして強調されていた影響もあったのか、今年で30になるといつ年、みんななんとなく緊張していたのを覚えている。

同年齢の友人の中には、30なんてまだまだ若いよーと「若さ」に価値を置き、それがまた手元にあると主張する者もいれば、この歳になったからこぞできることがあるよね、と前向き

に加齢を受け入れ、価値あるものは若さだけではないとする者もいた。

私はどっちもいかなかった。しつくりこないどころか、どちらにも抵抗を感じた。そして加齢受け入れ派の友人に「一緒に歳をとれてうれい」と笑いかけられたとき、その抵抗の正体をはっきりと悟ったのだ。「一緒に」という、この前提を受け入れられないのだ。同じ年ということは、歳を重ねていく感覚まで同じということではない。私の歳。私の老い。それらはすべて、私だけのものなのだから。

年齢不相応という言葉がある。「年齢」と「不相応」が組み合わされていることのほうが、私にはよほど不相応に思える。

(小説家)